

## 授業資料ナビゲータから始まる新しい学習支援の試み － アカデミック・リンクへの展開 －

竹内 比呂也

(千葉大学アカデミック・リンク・センター長, 附属図書館長, 文学部教授)

### 講演要旨

1990年代以降, 我が国では高等教育改革の機運は高まり, 自ら考え, すすんで学習する学生を育成するための学習環境の改善, 教育の質保証や授業の改善といった議論がなされるようになった。しかし, そのために大学図書館を活用するといった発想は少なくとも教育にたずさわる側からはなかなか出てこなかったが, 2008年12月の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」以降, アクティブ・ラーニングの推進や単位の実質化のための具体的方策が活発に議論されるようになり, また文部科学省の一連の助成事業を通じて, 大学図書館を使った学習支援の試みがなされるようになった。

千葉大学が2011年度から実現に向けて取り組んでいるアカデミック・リンクという構想は, 今日の大学に対する社会的要請に対応するための, 全学的な教育改革をめざす「実験」であるが, その特徴の一つは, 「コンテンツ」を十分に活用した学習を実現し, 知識基盤社会を生き抜く人材を養成することにある。その根幹には, 2006年度に開始した「リエゾン・ライブラリアン・プロジェクト」と名付けられた教員と図書館員との連携を強化する活動がある。この活動の核は, 2007年度から開始した, 普遍教育センター(千葉大学において全学の教養教育を統括するセンター)との連携による「授業資料ナビゲータ」である。これは特定の授業の受講者向けに, 学習を深め, 事前事後学習に役立つ図書やweb上のサイトを紹介するパスファインダーを授業担当教員と図書館員が協力して作成するもので, 2011年度は73科目について作成されるまでになった。この活動を通じた教員と図書館員の関係強化と, 図書館が直接的に個々の授業科目に関与するという試みが, アカデミック・リンクにおいて, 授業を最初の手がかりとして教員や学生に対してコンテンツ利用を促すという基本方針につながっている。

アカデミック・リンクは学習・教育に必要な「コンテンツ」, コンテンツの作成・提供のための「(情報通信)技術」, そして「教育そのもの」という, 知識基盤社会において教育改革を実行するために必要な三つの要素を取り込んでいる。アカデミック・リンクの実現のためには, 学習・教育に利用可能なコンテンツが安定的に, 学生に見える形で供給されることが不可欠である。より具体的に言えば, なるべく多くの出版物が電子化され, 本文中の文言で検索でき, そして各利用者の嗜好にあった形態(冊子体も含む)での, 購入を含めた入手可能性を高めることと, e-learning環境が整備されてlearning management system(LMS)を介した教材の電子的提供が一般化する中で, 教材としての講義動画の中やあるいは一般的な教材において, 著作物の一部をスムーズに利用できる環境を創出することが必要である。また, さまざまな著作物のある一章や雑誌論文によって構成される「コースパック」の電子的利用といった, 従来の流通単位とは異なるパッケージ化と授業での利用についても簡便な手続きでこれを実現できることが強く望まれる。これらの実現のためには, これまでの電子媒体と紙, あるいは図書と雑誌論文といった具合に対象コンテンツごとにバラバラであった検索環境を統合し, 「何があるか+どのように入手できるのか」という情報を一括して利用者に提供できるようなインターフェースがどうしても必要である。